

## 開発の現場から

### ベナンにおける体罰と暴力

浪川真祐子

草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員

在ベナン日本国大使館

「叩いた方がいいよ」。クラスが学級崩壊に陥る度に、児童たちが私にこう助言する。青年海外協力隊として、2016年から2018年までの2年間に西アフリカのベナンで過ごした。任地は大きな湖が自慢で、ゆったりと舟を漕ぐ漁師や水遊びをする子どもの姿が目を楽しませてくれる。その一方、活動拠点の小学校は、街の穏やかさとは対照的に、激しく体罰を行う教師や目に涙を溜める児童の姿で溢れる痛ましい世界だった。ベナンの教育現場は体罰と共にあると言っても過言ではない。今回は、そんな体罰の現状と影響についてご紹介したいと思う。



九九カードを使った活動

#### ベナンの教育現場における体罰

まず、前提として、体罰はベナンの児童法（Code de l'Enfant<sup>i</sup>）によって明確に禁止されている。既に90年代から、UNESCO及び国際NGOの活動により、教育現場における体罰の根絶に向けた行動は開始されていたが、家庭や教育機関等あらゆる場面における体罰の禁止が法律に明記されたのは、2015年が初めてのようだ。

しかし、法律が制定されて数年が経過したにも関わらず、今年2019年2月にも、ある中学校で痛ましい体罰事件が発生し話題になった。女子生徒が教員から数回叩かれた際に意識不明に陥り、その後歩行障害という重傷を負ってしまったのだ。この事件は、ベナンで行われている体罰の氷山の一角に過ぎない。本件以降も現場では変わらず体罰が継続されているのがその証拠だ。ここまでの重傷には至らずとも、全国の児童及び生徒は日々数え切れないほどのハイリスクな体罰に苦しめられている。

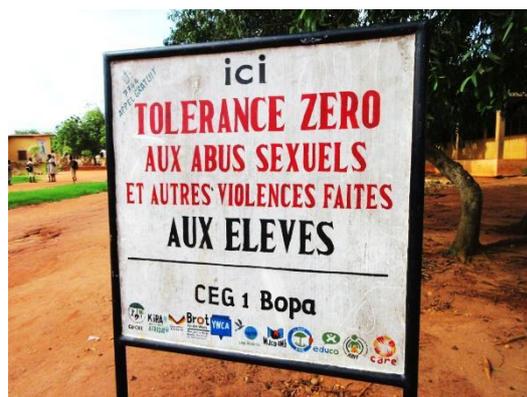
以下は筆者が小学校で実際に目撃した体罰の概要である。主な方法は、細長い麺棒のような棒で手のひらを叩く、（時には葉が付いたままの）木の枝で身体を叩くといったものだ。また、「お前は病気か」「耳が聞こえないのか」「怠け者」等の暴言を吐く言葉の暴力も存在する。一日学校に滞在すればこのような光景は嫌になるほど目にするようになるだろう。複数の教員の話によると、教員は体罰（ここでは叩くこと）を、「頑固な児童を統制するために必要なもの」と捉えているようである。確かに、児童が教員の指示を聞いていない、理解できない、従わないことによるトラブルはとても多い。思わず教員に同情してしまうほど、あらゆる局面で児童に指示を通すことは骨の折れる仕事ではある。とは言え、アンガーマネジメントを行わず、度を超えた体罰で児童への不満を

発散させているように見える教員も少なくない。

体罰は、大きく分けて二通りの状況下で行われる。一つ目は、「悪」とされる行動を取った場合。遅刻をした、嘘をついた、騒いでいて話を聞いていなかった、指示通り動かなかった、クラスメートに暴力を振るった等がこれに該当する（※暴力を暴力で罰しても何の説得力もないことを教員が理解しているかは不明。暴力を悪とする以上に、教員の手を煩わせたことに対する罰である可能性も考えられる）。そして、二つ目が、授業で与えられる課題が解けなかった場合だ。以前から学習していることを思い出せなかったり、直前に教わった内容を繰り返し間違えたりしたときに、教員は呆れ、その怒りを児童にぶつける。特定の問題が解けなかった者が片っ端から叩かれていく様子も珍しくない。先に紹介した不運な女子生徒の例もこれに該当する。彼女は、地理・歴史の課題で平均点以上を取ることができなかったという理由で、不幸にも歩けなくなるまでの仕打ちを受けてしまったのである。学習者が課題を解けなかったとき、教員が教え方を改善したり、個別指導を行うといった施策を取ったりすることは稀で、体罰ばかりが蔓延しているのがベナンの教育現場の悲しい現状である。未だ教育の質を語るには及ばない段階と言えるだろう。



教員はほぼ常に棒を握っている（奥）



中学校入口の看板「生徒への暴力を容認しない」

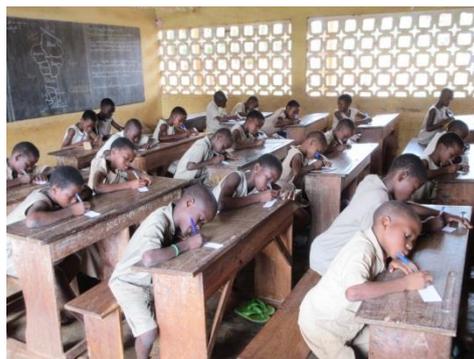
## 体罰による影響

ここからは、「子どもに対する体罰 その影響と関連性についてのリサーチレビュー」<sup>ii</sup>（「子どもに対するあらゆる体罰を終わらせるグローバル・イニシアティブ」作成、子どもすこやかサポートネット訳）より、体罰によって現れるという影響を以下三つ（「道徳的観念の内面化欠如」、「教育へのダメージ」、「攻撃性の増加」）抜粋し、ベナン社会の現状と照らし合わせていきたい。

「道徳的観念の内面化欠如」に関して、上記資料では、体罰を受けた子どもは「次回は違うように振る舞おうとするのではなく、望ましくない振る舞いを繰り返し、捕まらないようにする方法を考えるようになる」と指摘されている。これに関しては筆者にも思い当たる節がある。ベナンの児童は「勉強」ではなく「カンニング」で答えを見つけよ

うとする傾向が強く、授業中はクラスメート間のカンニングが絶えない。筆者主導の学習活動中にも、答えの書いてあるノートを盗み見る様子が複数見られたため、その次の回からは机の中を空にさせ、ノートを入れたかばんを手の届かない場所に置かせるように対処した。これで観念してくれるだろう…と安心したのも束の間、今度は手のひらや太ももに答えを予め写して盗み見る児童が現れた。このように、教員が勉強してほしいという思いで罰を与えたとしても、児童は期待した逆の方向へと向かってしまう。まさに先の指摘の通り、児童は「捕まらないようにする方法を考え」ていたのだ。

意外なことに、比較的罰を受ける回数が少ない成績優秀な児童でさえも、時にカンニングに手を出してしまうことがある。答えを間違えること以上に、いつ下されるかわからない体罰に不安を感じているのだろう。与えられた問題に対して“わからない”と感じた瞬間、もはや落ち着いて解いてみようという心の余裕はないように見えた。彼らがカンニングを行うのは、藁にもすがる心境だからかもしれない。



カンニング対策に苦戦した学習活動

「教育へのダメージ」に関して、資料内では、体罰は、成績及びIQの低さ、ボキャブラリー不足、認知能力の発達の遅れ・低さと関連があると述べられている。体罰以外の要因も考慮する必要はあるが、ベナンの子どもも例外ではない。彼らを日本の子どもと比較すると、語彙や発語の少なさが顕著で、小学3年生（7歳前後）になるまでは会話量や自己主張が少ないように見える。そういった児童は、外部からの刺激や呼びかけに対する反応も鈍く、常にぼーっとしていて自らの意思が見られない。話しかけられても一言も発さないなど、完全に受け身姿勢な様子も珍しくない。また、直前まで理解していたことを頻繁に忘れてしまうのも、認知能力の低さの一つの表れではないだろうか。資料内には「ティーンエイジャーの頃に親から体罰を受けた男性ほど、大学を卒業する傾向が低い」との記述もあったが、体罰により認知能力が下がり、何度繰り返しても学習した内容が定着しないことは以上の要因の一つであろう。ちなみに、ユネスコ統計研究所が公表しているデータ<sup>34</sup>によると、2015年の段階で、小学校の最終学年まで到達できるベナンの児童は全体の47.49%と半分にも満たない。学校及び家庭での体罰による負の影響がここにも現れている可能性がある。

「攻撃性の増加」に関して、上記レビューに関連する要約資料<sup>35</sup>内では、体罰を受けてきた子どもは、仲間に対してより攻撃的である傾向が高く、①「紛争の解決に暴力的手段」を使用したり、②「いじめ」をしたり、③「親に対して攻撃的」になること等が指摘されている（ナンバリングは筆者による後付け）。しかし、ベナンでこれらの現象はあまり顕著には現れていないというのが個人の見解だ。理由は、喧嘩で手を出したり、暴力を振るったりする児童の現れる頻度と様子に関して、日本とベナンに差異を感じなかったからだ。②いじめに関しても、あらゆる小学校のあらゆる学年において、それに該当する行為を目にする機会が全くなかった。また、家庭内の様子は数軒しか見たこと

がないが、③親への暴力に関しても、ベナンでは滅多にない事例だと考えられる。なぜなら、ベナンの親子関係の多くはフラットで親密なものではなく、上下関係だからだ。基本的に親子間では必要最低限の会話しか行われず、子どもは親の命令に従っているのみである。このため、学校・家庭に限らず厳しい上下関係に縛られているベナンでは、親への反抗や暴力は稀であると推察される。しかし、その反動もあってか、親や教員の圧力から解放された場面や、上下関係の上に立つとき、暴力に頼る姿が表出する。上で引用したリサーチ要約資料内でも、体罰を受けた子どもは大人になっても暴力行為を続けると指摘されている。幼少期から体罰を受けてきたがゆえに、「悪」の行動をする者や目下の者への暴力を容認してしまうのだろう。



反省の姿勢を取らされる児童



私立校内の壁画「虐待から守られる権利」

### ベナンにおけるあらゆる形態の体罰・暴力

ここまで、学校における教員から児童への体罰を中心に説明してきたが、学校内でも上記とは異なるパターンの体罰が、また学校外でもあらゆる体罰・暴力が行われていることに関して説明を加えたい。

学校内で児童から児童へ体罰が行われていることは、あまり知られていないのではないだろうか。各クラスの学級委員3名（大抵は成績優秀者、活発な児童、親族に教員がいる児童）が教員代理としてクラスメートを例の棒で叩いたり、あるいは、近くを通りかかった高学年の児童が突然低学年の教室に乗り込んで、騒がしい児童を暴力で制したりする。本人に不利益があるかどうかに関わらず、立場・年齢が上の者が下の者を罰するのは当然のことらしい。悲しいことに、叱られる際には叩かれることが基本形となっているこの国の子どもは、もはや口で叱られるだけでは怒られている自覚が生まれない。そして、叩かれなければ悪いことをしている自覚もできなくなってしまう。そのため、児童たちは「（口で怒っても聞かないから）叩いた方がいいよ」と私に助言をしてきたのだろう。

ベナン社会で見られる体罰・暴力には、親から子、夫から妻、人間から動物、そして善良な市民から犯罪者へといった形態がある。親が子どもをサンダルで叩いたり、叩くふりをして脅したりするため、幼児がその真似をする様子は頻繁に見られる。

また、家庭で弱い立場になりやすい妻が夫から暴力を受け、福祉センターという施設に相談や保護を求めにくることも少なくない。人間の生活の邪魔をする動物に石を投げつけたり、叩いたり、蹴ったりするのも日常の光景だ。また、ベナンには「民衆制裁」の文化が深く根付いている。窃盗等の悪事を働いた者を市民が捕えた際に、取り囲んで罵声を浴びせたり、暴力を加えたりするものだ。バイクを盗んだ者がガソリンをかけられ焼き殺されたという過度な制裁の話を目にしたのも一度や二度ではない。この場合も、善良な市民（上の立場）が悪事を働いた者（下の立場）に、暴力を加えるということが正義として行われていると考えられる。あらゆる形態の暴力が正当化されることなく禁止される日はいつ訪れるのだろうか。



教材にも暴力の様子が描かれている  
 右上：子どもがロバを叩く様子  
 右下：父親が子を叩く様子

## おわりに

今年5月初旬、国民議会議員選挙において政府が野党候補を実質的に排除したことに對して反発が起こり、一部が暴徒化、現大統領の関係する建物等が襲撃・破壊された。幸い国家体制が覆るほどの動きには発展しなかったが、暴力を使って主張を訴えようとする姿勢が少なからず存在することが確認された。彼らが言葉ではなく、攻撃的な手段で反発を表現した背景には、幼少期の体罰によって醸成された攻撃性や、暴力による解決を肯定する意識が一つの要因として考えられるのではないだろうかと私自身は危惧している。体罰はその発生件数の多さゆえに取り締まりが難しいのが現実だが、今後は、道具を使用する体罰の禁止や、体罰に頼らない学級経営ノウハウの共有等を通じた段階的かつ実質的な規制強化による体罰の縮小に期待したい。教育現場がその効果を最大限に引き出し、同国の政府行動計画（PAG）における戦略目標の一つ「教育成果の改善」を達成するためにも、子どもへの体罰という一つのマイナス要因が、改善の道を辿ることを祈っている。

<sup>i</sup> L'Assemblée Nationale en République du Bénin (2015), “Loi n° 2015-08 portant code de l'enfant en République du Bénin”, <http://www.legibenin.net/pdfs/Codes/DSL%20LOI%20N%20%202015%2008%20PORTANT%20CODE%20ENFANT.pdf>（最終閲覧日：2019年12月1日）

<sup>ii</sup> Global Initiative to End All Corporal Punishment of Children 発行、子どもすこやかサポートネット訳（2015）『子どもに対する体罰 その影響と関連性についてのリサーチレビュー』 <https://www.kodomosukoyaka.net/pdf/2015-GI-review-J.pdf>（最終閲覧日：2019年12月5日）

<sup>iii</sup> UNESCO Institute for Statistics (2019) “Benin, Education and Literacy”, <http://uis.unesco.org/en/country/bj?theme=education-and-literacy>（最終閲覧日：2019年12月8日）

---

iv Global Initiative to End All Corporal Punishment of Children 発行、子どもすこやかサポートネット訳（2016）『子どもに対する体罰：その影響と関連性についてのリサーチ要約』 <https://www.kodomosukoyaka.net/pdf/2016-GI-summary-J.pdf>（最終閲覧日：2019年12月1日）